
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ
No. 81 April 2011

2011年度大会—青山学院女子短期大学で 大会のパネルと自由論題報告を募集中（4月末締切）

ロシア史研究会2011年度の大会準備が始まっています。今年は、10月22(土)、23(日)の両日に青山学院女子短期大学で開催されることになりました。2011年度大会共通論題について、委員会としての取り組みの現状と方針は以下のとおりです。一つは、富田武会員から寄せられた要望と提案（「シベリア抑留」をテーマとしたシンポジウム）を了承し、今後、企画の詳細について富田会員に尽力をお願いしつつ委員会で検討する予定です。二つ目は、農奴解放150周年を記念した催しを、という会員の提案を受け、仮のテーマとして「農奴解放150年—大改革を振り返る」を設定し、その具体的な実現可能性（有意義な催しとするための企画趣旨や報告者など）について、この分野に詳しい会員の協力を仰ぎながら検討を進めています。

上記の二つの共通論題のうち後者はまだ確定した段階ではありませんので、テーマその他についてご意見がありましたら是非ともお寄せください。また、パネルについても4月末日が応募締め切りですので、積極的なご提案をお願いします。

2011年4月1日

ロシア史研究会委員会

<ロシア史研例会報告>

今年1月・2月の例会とともに、昨年7月の例会についてもお伝えします。なお3月19日に予定されておりました現代史研究会との合同例会は、今回の震災の影響で中止になりました。

<例会 2010年7月24日>

富田武『戦間期の日ソ関係』岩波書店 合評会

評者：寺山恭輔氏（東北大学東北アジア研究センター）

服部龍二氏（中央大学 総合政策学部）

日時：2010年7月24日(土) 午後3時から

会場：立教大学池袋キャンパス11号館A101教室（東京都豊島区西池袋3-34-1）

中村裕（秋田大学）

戦間期の日ソ関係に関する富田氏の著書の合評会が、7月24日（2010年）立教大学で行われた。報告者は、服部龍二氏、寺山恭輔氏であった。両氏は、富田氏が日ソ関係を論じる際に外交や安全保障だけでなく、経済・通商関係を重視した点に注目した。

服部氏は、「田中上奏文」の信憑性を疑っていたが後にそれを日本帝国主義の侵略政策の根拠として言及するようになったソ連の本意に関して質問した。この点に関しては、当日富田氏から「田中メモランダム」はソ連でどう扱われたのかに関する資料が提出され、ソ連での「田中メモランダム」史観が形成された経緯が改めて明らかにされた。また、服部氏からは、1930年代を通して日ソ不可侵条約に対して消極的であった日本の態度をソ連はどのように見ていたのか、それとの関連でソ連は広田弘毅（駐ソ大使、外相、首相歴任）をどのように評価していたのかに関する質問があった。広田に関しては、中東鉄道問題での交渉相手であったこともあって、1935年前半までは好意的であったが、同年後半からは否定的な評価に変わり、特に首相就任の1936年3月からは軍の意向に縛られているといった厳しい評価になったとの、富田氏の回答があった。

寺山氏は、漁業交渉の分析の鮮やかさに比べて、サハリンをめぐる利権交渉、特に石油・石炭資源に関する言及が少ないと指摘した。寺山氏は、満州事変以後日本に関してはスターリンが自らも参加するアド・ホックの小委員会を通して、対日問題を主導していたという点に関連して、それは20年代からそうであったと指摘した。チチェーリン、カラハンは早い時期から対日問題に関してスターリンに報告を行っているとされた。漁区をめぐって生じた宇田「不正入札事件」（ソ連の代理人としての宇田の競売参加）に関して、寺山氏は、ソ連側の資料に基づいて、それはトロヤノフスキー大使の個人画策というよりも、漁業権益をできるだけ日本に渡さないという当時のソ連の国家的方針であったと述べた。

富田氏の著書が意欲的な試みであったために、この他論点は多岐にわたり、報告者に加え多くの参加者から問題の指摘・提起がなされ、いささか注文の多い合評会となった。

＜例会 2011年1月8日＞

パネル・ディスカッション「第一次世界大戦再考」

日時：2011年1月8日（土） 午後2時から

会場：東京理科大学森戸記念館第1会議室（東京都新宿区神楽坂4-2-2）

Peter Gatrell "'A Whole Empire Walking': ten years on"

池田嘉郎「祖国の自然が傷病兵を癒す：第一次大戦中のロシア保養地とナショナリズム」

麻田雅文「ロシアの敗北は東から始まった：第一次大戦中のロシア極東における輸送システムの崩壊」

ヤロスラフ・シュラトフ「ロシアの政治アクターと対日外交、1905-1917：「敵」から「同盟者」への困難な道」



(写真は2011年1月8日の例会/ 梶 雅範 撮影)

瀧口順也（北海道大学スラブ研究センター）

今例会は、英国マンチェスター大学からピーター・ガトレル教授を招き、教授が長く専門とされてきた第一次世界大戦をテーマに、幅広い視点からロシアにとっての大戦の経験と意義、その影響などを考察する機会となった。

通常、外国から報告者を招く場合には、報告と質問・討論で構成するのが常らしいが、今回は、ガトレル教授にとって初の日本滞在という事もあり、また日本人の研究者と接する機会を設けて欲しいとの要望があり、若手研究者（ヤロスラフ・シュラトフ氏、麻田雅文氏、池田嘉郎氏）の報告パネルと組み合わせ、二部構成での例会となった。ガトレル教授との「対話」を目指す例会ということもあり、報告だけでなく、進行、質問、討論すべてが英語で行われたロシア史研究会史上に於いて異色の例会と相成った。

ガトレル報告は、1999年に公刊された自著 *A Whole Empire Walking: Refugees in Russia during the World War I* (Indiana University Press) をその発表から10余年を経た現在に於いて再検討し、refugee historyの今日的な意義を問い直すものであった。第二部の若手研究者報告では、シュラトフ氏、麻田氏、池田氏が報告を行った。シュラトフ報告は1905－1917年の日露関係の変遷をロシア側の主要機関と人物に焦点を当て考察した。麻田報告は、第一次大戦期のロシア極東地域を取り上げ、ロシアの大戦での敗北の主要因は中東鉄道を始めとする鉄道網と輸送機関の不整備にあると論じた。池田報告は、大戦中のロシア国内で広がった傷病者の為の保養施設の展開に着目し、傷病者の治癒を目的とした保養施設は、同時に、ロシアの「豊かな自然」を強調する事で「ネイション」の概念を醸成する為に政治的に用いられたものでもあると指摘した（各報告の詳細はロシア史研究会HP上で原稿が掲載）。

これらの報告に引き続き、ガトレル教授が各報告にコメントを寄せた。丁寧なコメントと鋭い質問は、司会の筆者もフロアの参加者も大いに知的刺激を受けるものであったが、各報告者にとっても変えがたい経験になったのではないだろうか。教授のコメントに続き、参加者とガトレル教授を含む四名の報告者との間で質疑応答と討論が行われた。

結果的に、計四時間半にも及ぶ長丁場の例会となったが、長いばかりでなく内容においても充実した例会であったと思う。例会の冒頭部で司会の立場から筆者も述べたが、2014年の第一次世界大戦開戦100周年に向けて日本の研究者が何を提示できるのか考え始めなければならない時期に差し掛かっている。この例会を足がかりに、継続的な取り組みへと発展させられる事を望んでいる。

残念だったのは、正月明け早々、また三連休の初日という事もあってか、期待していたほどの参加者が集まらなかった事である（計20名弱）。とりわけ、院生の参加者が皆無だった事は、無念な思いである。告知の方法や日程の調整の問題もあることも認識しており、各方面からの批判を仰ぎたい。

今例会を組織・企画の段階から携わる事ができたのは、筆者にとっては素晴らしい経験となった。会を大きな問題もなく終了することができたのも、偏にロシア史研究会理事の方々のご理解と協力を得る事が出来たからによる。とりわけ、池田嘉郎氏には企画

案の段階から相談に乗って頂き、多大なサポートとアドバイスを承った。また、英語での報告という厄介な仕事を快く(?)引き受けてくれた、三名の日本側の報告者にも大変に感謝している。最後にではあるが、多忙な日程の中幾つかの提案を全て快諾し、普段通りのチャージングさで会を牽引してくれたガトレル教授に心よりお礼申し上げたい。

＜例会 2011年1月22日＞

塩川伸明『冷戦終焉20年—何が、どのようにして終わったのか』合評会

日時: 1月22日(土) 午後3時 ソビエト史研究会との共催

評者: 鈴木義一氏(東京外国語大学)、大串敦氏(早稲田大学)

会場: 東京大学弥生総合研究棟研究会室Y505号室(東京都文京区本郷7-3-1)

以下は、評者による報告要旨です。

大串敦(早稲田大学)

筆者は1973年生まれであるが、大学教育を受ける時点でソ連は解体していた。その意味では「冷戦戦後世代」の研究者の走りと言える。そのような後進の研究者の立場から、塩川氏の新著を通して感じた論点を先輩世代の研究者に提出してみることを主眼に、報告を行った。

本書を一読して第一に感じたことは、我々後進の研究者も先輩諸氏も、ディシプリン系・他地域の研究者と対話し、打って出なければいけない、ということである。本書は、「現存した社会主義」を考察することの重要性を、一般読者と他分野・他地域の専門家に訴えている。スラブ・ユーラシア地域研究は優れた専門研究を生み出している一方、分野の異なる専門家には、それらは敷居の高いものになってしまう傾向がある。塩川氏は、他分野の専門家もその著作を手にとる数少ない研究者であり、本書もそうした優れた著作の一つとなろう。ただし、塩川氏一人にその任の全てを押しつけるのはいささか酷である。我々全員の課題である。「冷戦」を銘打ったパネルで旧東側に関する報告が一つもない、というような状況をこのまま放置してはいけないのである。

第二に、共産主義研究における知識社会学をする必要性を感じた。本書では反ソ、親ソ、知ソの三類型が提出されているが、筆者は「反ソから派生した知ソ」と「親ソから派生した知ソ」のようなものを想定できないか、と提起した。これも満足なものとはいえないが、いずれにしろ、ソ連解体後における研究の視座変化を考えるためにも、共産主義研究の知識社会学を行うことが求められよう。

第三に、旧ソ連東欧の外交・国際関係研究を活性化させることが必要である。本書では、国際関係に関しては、「いかに終わったのか」と「終わり方がその後の世界秩序のいかに影響しているのか」に集中している。第Ⅱ章で冷戦とは何だったのか、ということがもう少し詳細に議論されるべきであったろう。とはいえ、筆者を含め、スラブ・ユーラシア地域の政治研究者は内政に偏りがちで、国際関係の研究者は横手氏、岩下氏など少数である。先行研究の蓄積が多くないことが本書にも影響を与えてしまっているのかもしれない。

細部に関しては、SDIや「中国の道」の可能性、共産党の社民党化の可能性などなどに関して提起したが、紙幅の関係で割愛したい。いずれにしても、本書は一般読者だけでなく、専門家にとっても刺激に満ちた好著であり、「冷戦戦中世代」と「冷戦戦後世代」の研究者も本書の問題提起を受けて、応答していかなければならない。

鈴木義一（東京外国語大学）

本書は、冷戦体制とその中のソ連について、何が終わったのか、どのように終わったのか、その後の変化はどうなっているのかを論じている。すなわち、ソヴィエト社会主義体制が存在した時期、体制転換期、ソ連解体後の3つの時期を通してその動態を論じており、そのことの意味は大きい。現代の国際関係や国際経済を論じる際にも、ロシアおよびその他の旧ソ連諸国の現状を論じる際にも、「冷戦終結」や体制転換を起点とし、社会主義体制を単に「過去のもの」として扱うことが少なくない。一方で、現在の旧ソ連諸国が抱える問題を安易にソ連社会主義体制に帰着させる議論もあるが、いずれも本書が論じている3つの時期の相互関係についての理解を欠いたものである。

次に本書の特徴として指摘できるのは、網羅的で周到な論理展開である。これには以下の3つの点を指摘しておきたい。第1に、限られた紙幅の中でも目配りの利いた行き届いた記述がなされている。たとえば、ロシア革命の構造とその複合的解釈、ソヴィエト民主主義の理念と実態、近代化の特徴、社会主義体制における公正と格差の関係、計画経済を補完するサブシステムなど、簡潔な記述の中に社会主義体制についての必要にして十分な説明がある。

第2に、社会主義体制とその崩壊に至る過程の動態的変化の説明である。著者は以前、社会主義体制崩壊の「四層認識」を提起したが、本書ではそれをさらに緻密にすることに成功している。それは以下の通りである。まず社会主義の理想を理解した上で、現実とは異なることを示す。しかし多くの矛盾を抱えながらもこの体制は存続していたのであり、その存立のメカニズムを明らかにする。さらに、体制の矛盾に対する自己認識と改革論が存在していたことを指摘するが、改革の実行はそれにともなうジレンマを生み、それが体制転換をもたらすことになる。

第3に、ソ連解体の「未練論」でも「宿命論」でもない記述をあげることができる。この点では、長期・中期・短期の視点を組み合わせるという方法が役立っている。それにより、ソ連についても、冷戦の終結についても、ある時期までは軟着陸の可能性が存在したものの、それが消滅して以降は一気に事態が進展するという過程を実にうまく説明している。

合評会では以上の全体的な評価に加えて、体制転換論についての政治学と経済学の視点、経済的自由主義と政治的リベラリズムの両立性、ゴルバチョフの「新思考外交」の源流などについての疑問とコメントを述べた。

<例会 2011年2月19日>

和田春樹『日露戦争』上下 合評会

日時 2011年2月19日（土）午後3時から

場所 東京理科大学理窓会館 3階 第2会議室

評者 神長英輔（新潟国際情報大学）、麓慎一（新潟大学）



（写真は2011年2月19日の例会/ 梶 雅範 撮影）

以下は、評者の一人麓慎一氏による報告です。

和田春樹氏の『日露戦争』は、日露戦争の開戦過程に関する研究を大きく進展させた。合評会では、具体的に以下の点を指摘し、本書の特徴と意義について私見を示した。

第一は、日露戦争開戦過程に関する日本史研究の現状である。この分野における日本史の研究は、1990年代の中頃から新たな展開があった。この新しい研究の核心は、日露戦争の回避の可能性を従来よりも大きかったと捉える点にある。和田氏の研究は、これらの研究に対する反論として位置づけられる。

第二は、「閔妃殺害」や「高宗の露館播遷」などの分析にみられるように、韓国の政治状況を日本およびロシアの史料と関連づけて分析したことが、大きな成果である。従来、日本・ロシア・韓国において相互に参照されることなく進展していた研究を統合して日露戦争にいたる過程を描き出した。

第三は、ロシア国立海軍文書館のアレクセイ極東太守の史料を丹念に利用して、彼に対する従来のイメージを大きく変えた点が注目される。これを契機に、極東太守制の研究の進展が期待できることを指摘した。具体的には、アレクセイ極東太守とその外交を担当していたプランソンとの関係の分析が極東太守制の研究を大きく進展させる、と推定される。

第四は、本書で分析されている日露戦争開戦直前のニコライ皇帝からアレクセイ極東太守への1904年1月27日（西暦）付電報やアレクセイ極東太守からアバサ（極東委員会委員長）への1904年1月28日（西暦）付電報から帝政ロシアの政策の決定過程が分裂していることが推定される。この「非公式」と評されるような政策の決定過程を分析することで、日露開戦過程の研究をさらに進展させることができることを指摘

した。

合評会では、以上の点を中心に本書の特徴と意義を示した。

＜今後の例会の予定＞

4月には例会の予定はありません。5月例会は、森永貴子氏（立命館大学）の新刊『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアにおけるユーラシア商業』（北海道大学出版会、2010）の合評会を行ないます。評者は塩谷昌史氏（東北大学）です。日時は5月28日（土）午後3時～、場所は東京理科大学森戸記念館の予定です。詳細は追ってメール・葉書にて連絡いたします。

＜『ロシア史研究案内—ロシア史研究会の五十年』（仮題）の準備状況＞

去る2月19日の委員会で、懸案の資料集の刊行について議論した結果、以下のような形に落ち着きました。出来るだけ早期の刊行を目指していきますので、会員の皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。なお市販も予定しておりますが詳細は未定です。

編集委員 池田嘉郎、崔在東、土屋好古、土肥恒之、富田武、中嶋毅

『ロシア史研究案内—ロシア史研究会の五十年』（仮題）

第一部 ロシア史研究の現在（二十枚ほどの研究動向を十本から十五本ほど）

第二部 座談会 初期の研究会を中心に（長老会員と編集委員）

第三部 資料集（例会の記録、『ロシア史研究』の総目次、歴代委員会等）

年表、人名索引

＜編集委員会より＞

以下の図書が寄贈されましたのでお知らせします。

『古代ロシア研究』XXII 2010年11月、日本古代ロシア研究会

ローバート・F・バーンズ『ロシアの歴史家 V・O・クリュチェフスキー』清水昭雄、加藤史朗、土肥恒之共訳 細流社、2010年10月

＜会計担当より＞

ロシア史研究会の会計年度は4月1日ではなく9月1日始まりです。2010/2011年度（2010年9月1日から2011年8月31日）の会費をまだお支払いでない方は、ご入金をお願いいたします。休会期間や退会期日も会計年度と同じく9月-8月で手続きを行ないますので、ご注意ください。

＜事務局からのお知らせ＞

前号(第80号)でお知らせしたように、大会のパネルと自由論題の募集をしています。ロシア史研究会のホームページに応募フォームがありますので、必要事項を記入して、事務局宛（jssrh-office(at)tufs.ac.jp）にお送り下さい。

Faxは、042-330-5429です。なお、応募の締め切りは4月30日です。

東日本大震災により亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被害を受けられた皆様にお見舞い申し上げます。

3月19日にサンクト・ペテルブルグに立寄った会員によれば、同地の日本総領事館の前にたくさんの花と千羽鶴が置かれ、日本人への励ましの便りが届いていたそうです。

ロシア史研ニューズレター

第81号 2011年4月14日発行

編集・発行 ロシア史研究会委員会

〒183-8534

東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学外国語学部

鈴木義一研究室気付
